

序論)

まずは皆さんに2つの問題を出したいと思います。

第一問 聖書の中で一番多く登場する町の名前はなんですか？

ヒント 大きな神殿があった場所。 イエス様が最後の晩餐をし、十字架に付けられた場所

答え エルサレム 聖書の中にエルサレムは822回も登場します。歴史上のエルサレムの町だけでなく。神の都を象徴する表現としても使われます。

第二問 エルサレムの次に聖書に多く登場する町の名前はなんですか？

ヒント 大きな塔が建てられようとしたところ。 大淫婦といわれたりもする。

答え バビロン バビロンは聖書の中に305回も登場し、歴史上のバビロンの町だけでなく、人々を罪に誘惑するサタンの町を象徴する表現としても使われています。

今日の箇所は、そのエルサレムの次に聖書で有名なバビロンについての預言です。具体的には、神様によって高慢な町バビロンが裁かれ、滅ぼされることが語られています。

問題は、イザヤが活動していた紀元前700年ごろのバビロンは、南ユダヤ王国を滅ぼすような世界帝国にはなっておらず、どちらかというとき当時のユダヤ人たちにとって滅びてほしい国はバビロンではなく、アッシリアでした。

でも、神様はイスラエルの周辺諸国に対する裁きの預言の一番最初に、このバビロンについての預言を語られたのです。なぜでしょうか？それはここで語られるバビロンとは、ただ歴史上に存在したバビロンだけではなく、神様に敵対するサタンが支配する国。サタンに支配された人々のことを指しているからです。

つまり、今日とりあつかうイザヤ書13章の預言は、歴史上のバビロンが滅ぼされることと、神様に敵対するサタンの国が滅ぼされることの2つの意味を含んだ預言なのです。神様は、【主】に敵対する者を徹底的に滅ぼして、義を示してくださるお方です。私達はこの13章から神様の徹底的なさばきと義を学んでいきたいと思えます。

聖別された者の招集)

まずは神様がバビロンを滅ぼすために、神様によって聖別された人たちを呼び集めている箇所を読みましょう。2-3節です。

13:2 「はげ山の上に旗を掲げ、彼らに向かって声をあげ、手を振って、彼らを貴族の門に入らせよ。

13:3 わたしは、わたしに聖別された者たちに命じ、また、わが怒りを晴らす勇士たち、わが威光に歓喜する者たちを呼び集めた。」

「はげ山の上」・・・はげ山ですから、どこからも木々に遮られることなく見渡すことができる山の上ですね。その一番目立つところに【主】の旗を掲げて【主】は命令をされます。どんな命令かというと神様によって呼び集められた人を「貴族の門に入らせよ」という命令です。この「貴族の門」とはバビロンのことで、神様はバビロンを倒すためにより集められた勇士たち、神様の威光を心から喜ぶものたちを、バビロンのところに突入させる。とされています。

聖書学者によっては、この「聖別された者たち」とは神の国の天使たちのことだと言ったり、実際に歴史上でバビロンを滅ぼしたペルシャの王キュロスと、そのキュロスによって先導されたペルシャ・メディア連合軍だと言ったりする人もいます。しかし、私はあまりこれだと限定して理解するのではなくって、聖書が言う通りに、【主】が聖別して集めた勇士たちが、神様の敵対者であるバビロンと戦うために送り出される。というように理解するのが良いと思っています。

続けて 4-5 節を読んでみましょう。

13:4 おびたしい民にも似た、山々のとどろく音、集まって来る国々、王国のどよめく音がする。万軍の【主】が軍隊を召集しておられるのだ。

13:5 彼らは遠い地から、天の果てからやって来る。全世界を滅ぼすための、【主】とその憤りの器だ。

この【主】に聖別された人々というのは、世界中から集められた軍隊であって、全世界を滅ぼすための、【主】とその憤りの器だ。と書かれています。ここでも神様ばさばく対象が、バビロンという小さな一つの国のことではなくって、全世界といわれているので、この預言が世界的な神様に敵対する人々、サタンの国の人々に対する裁きの預言であることがわかります。

神様は、【主】に敵対する者たち、サタンに支配されて【主】に逆らい続ける者た

ちを放って置くお方ではないのです。神様は「【主】の日」と言われる日に、サタンの国を完全に破壊されるのです。だから、神様はそのサタンの国に向かって「泣き叫べ」と言われています。6節を読みましょう。

13:6 泣き叫べ。【主】の日は近い。それは全能者からの破壊としてやって来る。

みなさん、【主】は私達にとっては救いの神ですけど、バビロンに属する人たち、サタンに支配されている人たちにとっては破壊の神なのです。だから、この【主】の日が来る前に人は、サタンの支配から神の国へと方向転換をしなければならないのです。

みなさん、サタンに支配され、神に逆らう者に従いつづける者の未来は、泣き叫ぶしかない。ということをお心に刻みましょう。

だから、神様はこの裁きの日に、サタンに属する人たちがどのような反応をするのかを、7-8節で言われています。

13:7 それゆえ、すべての者は氣力を失い、すべての人の心は萎える。

13:8 彼らはおじ惑い、子を産む女が身もだえするように、苦しみと激しい痛みが彼らを襲う。彼らは炎のような顔で互いに驚く。

【主】の日、【主】のさばきの日がきたならば、バビロンに属する人たち、神様にさからい続けてきた人たちは、氣力を失い、心はなえるしかありません。なぜならば、その日が来たならばサタンに属する人たちは、女性が経験する産みの苦しみのときのような激しい痛みを経験しなければいけないし、顔から火がでるような恥をその罪のゆえに深く覚えなければ行けないからです。

先日、私のところに「セカンドチャンスはある」という本が届きましたけども、みなさん「セカンドチャンス」って知っていますか？ 「セカンドチャンス」というのは、例えこの世で神様を信じなかったとしても、イエス様を信じなかったとしても、死んだあとでもイエス様を信じて救われるチャンスがある。という話です。聖書のごく一部のみことばの言葉尻を捕まえて、この世でイエス様を信じなくても大丈夫。死んだあとの人にも救われるチャンスがあるから、神様のさばきを恐れなくても大丈夫という間違った教えです。

でも、それは聖書の多くの箇所でも語られる神様の徹底的なさばきの預言とは合わ

ないのです。神様は、サタンに属しつづけてしまった者を裁かれるお方であり、その裁きの日がきたならば、気力を失い、諦めるしか無い。恥を覚えるしかない状態になってしまうことを強調しています。これは悔い改めの緊急性の強調でもあります。

だから、私達はセカンドチャンスがあるから大丈夫なんて悠長な事を言ってもらえず、【主】の日がくる前にサタンの支配から神の国へと方向転換をしなければいけないのです。

多くの者が裁かれる)

神様の徹底的な裁きは 9-11 節の部分にも書かれています。

13:9 「見よ、【主】の日が来る。憤りと燃える怒りの、残酷な日が。地は荒廃に帰し、主は罪人どもをそこから根絶やしにする。

13:10 天の星、天のオリオン座はその光を放たず、太陽は日の出から暗く、月もその光を放たない。

13:11 わたしは、世界をその悪のゆえに罰し、悪しき者をその咎のゆえに罰する。不遜な者の誇りをくじき、横暴な者の高ぶりを低くする。

【主】のさばきの日、【主】の日は、神様は罪人をあわれんで救い出すのではなくって根絶やしにされます。まさに残酷な日といわれているように、【主】のさばきの日には、月も星も太陽も光を放たなくなります。これは皆既日食のような自然現象が起こるといのように理解してもいいと思いますけども、私はこの箇所は【主】に裁かれる者たちにとって、光となるような希望は一切取り除かれるということ表現しているのだと思います。

神様は、【主】の日に世界そのものを、その悪のゆえに罰せられるのです。神様なんて無視して大丈夫、【主】に逆らって大丈夫と思っている者たちの高ぶりを打ち砕かれる。これが【主】の裁きです。

そして、この【主】の裁きがなされた結果どうなるかというと、12 節

13:12 わたしは人を純金よりも、人間をオフィルの金よりも尊くする。

金ってなかなか取れないから価値があるものとされていますね。当時オフエルの金というのは、金の中でもより純度が高くってより価値がある貴重な金として扱われていました。神様は、【主】の日にさばきを行ったあと、人間をそのオフエルの金

よりも尊くすると言われていています。これはつまり、それだけ人の大部分は、バビロンに属する者。サタンに属する者として、【主】に裁かれてしまう。ということの意味しています。

実際、黙示録に書かれている裁きの箇所をみると、黙示録 6 章 8 節には地上の四分の一が剣と飢饉と死病によって殺される。と書かれており、黙示録 8 章 11 節には、世界の三分の一の川の水が苦くなって多くの人々が死ぬと書かれており、9 章には恐ろしい軍隊がやってきて人類の三分の一が殺され、16 章には激しい太陽光線によってさらに多くの人々が死ぬことが書かれています。

このようにして【主】のさばきの時には、本当に本当に多くの人たちが裁かれ、滅ぼされ、そして、そのような裁きがあっても残る人たちというのは金よりも貴重な存在になるのです。

聖書はこのようにして【主】のさばきについての危機感を強調しています。なぜでしょうか。それは悔い改めさせるためです。

私達は子どもたちに、道路にでたら大変な目に合うよ。とか、車に轢かれたら死んじゃうよ。とか、ある意味では脅しみたいなことを子供に言ったりします。それはなぜかというと子供のいのちを守るためです。私達は、子どもたちを守り助けるために、時には怖いことをいいます。

聖書の中の裁きの預言も基本的には同じなのです。バビロンに属したままでいたり、サタンの支配の中で神様に逆らい続けるのならば、このような滅びがある。ということを伝えることによって、バビロンに属している状態であり、サタンに支配されている状態から抜け出さなければいけない。ということ、【主】は私達に自覚させようとしているのです。

徹底的な【主】の裁き)

そして、【主】の裁きは呼び集められた勇士たちだけでなく、地震のような世界を揺り動かす出来事によってなされることが 13-16 節に書かれています。

13:13 それゆえ、わたしは天を震わせる。大地はその基から揺れ動く。万軍の【主】の憤りによって、その燃える怒りの日に。

13:14 追い立てられた、かもしかのように、集める者のいない羊の群れのようになって、彼らはそれぞれ自分の民の方に向かい、それぞれ自分の地へ逃げ去る。

13:15 見つけられた者は、みな刺し殺され、連れて行かれた者は、みな剣に倒れる。

13:16 彼らの幼子たちは目の前で八つ裂きにされ、家は略奪され、妻は犯される。

ここでも非常に悲惨な状態にバビロンになることが書かれています。特に 16 節の幼子が八つ裂きにされ、妻が犯される。なんて表現は、神様の怒りによる裁きがどれだけ悲惨なものなのかを、よく表現しています。

この箇所だけをみると、愛の神様がなんで罪のない幼子を殺すのだ。という文句がでそうですけども、基本的にこの預言は【主】に逆らうサタンの国バビロンの人々に対する神様の裁きの預言であるということを理解してほしいと思います。

ここでいう幼子とは、罪のない無垢な幼子というよりは、【主】に逆らう国バビロンの幼子。神様に逆らう者としての幼子が裁かれる。という意味で理解されるのが良いと思います。

そして、妻が犯される。というのも、この当時の価値観でいうと、妻というのは家の財産と同じ扱いなので、「家が略奪される。」ことの延長として妻が犯されると言われています。つまり、サタンが支配している国において、妻のように一番大切にされていたものもすべてが取り去られるということです。

【主】のさばきがあるとき、【主】の敵対者には何も残らないのです。

そして、それは歴史上のバビロンにもなされた裁きでもありました。17-18 節を読みましょう。

13:17 見よ、わたしは彼らに対してメディア人を奮い立たせる。彼らは銀をもともせず、金さえ喜ばず、

13:18 その弓は若者たちを撃ち倒す。彼らは胎の実さえあわれまず、子どもたちにさえあわれみをかけない。

17 節のメディア人を奮い立たせるというのは、歴史上のバビロン帝国を倒したペルシャの王キュロスが、バビロンを滅ぼすために使ったメディア人のことです。

そして、【主】のさばきがなされるときには、銀や金は意味をなさず、若いから、子供だから、胎児だから。という言い訳もきかれずに徹底的に裁かれるのです。

わかるでしょうか。【主】のさばきのときには金や銀のような財産を差し出したとしても許されず、若さや幼さを言い訳にしても許されないのです。その時にはどんな悪あがきをしても無駄なのです。

みなさん、【主】が悪を打つためにおこなう裁きはこれほどまでに徹底的なものなのです。

二度と復興しない)

そして、このような徹底的な【主】の裁きがなされたあとのバビロンはどのようなことになるかという。19-22節。

13:19 こうして、諸王国の誉れ、カルデア人の輝かしい誇りであるバビロンは、神がソドム、ゴモラを滅ぼしたときのようになる。

13:20 そこには永久に住む者もなく、代々にわたり、住みつく者もない。アラビア人もそこには天幕を張らず、牧者たちもそこに群れを伏させない。

13:21 そこには荒野の獣が伏し、彼らの家々には、みみずくがあふれる。そこには、だちょうも住み、雄やぎがそこで飛び跳ねる。

13:22 山犬はその砦で、ジャッカルは豪華な宮殿でほえ交わす。その時が来るのは近く、その日はもう延ばされることはない。」

一言で言えば、【主】に逆らう国。サタンの国バビロンは二度と復興することができない。ということです。神様がサタンを打つということは、そうゆうことなのです。二度とサタンが立ち上がることがないようにされるのです。

実際、元イラクの大統領サダム・フセインをみなさんは覚えておられるでしょうか。この人ですね。彼は。バビロンという町を再建しようとしてしました。でも、結果はどうなったかという、彼は戦争犯罪人として処刑され、バビロンは再建されませんでした。

【主】のさばきの日、【主】がサタンの国バビロンを倒されると、そのサタンの国は二度と復興することはありません。これは私達にとって大きな希望となるのではないのでしょうか。

私達は、【主】イエスキリストによって救われて、バビロンではなく神の国の住人にされました。しかし、この世において私達はいつもサタンの攻撃を受けています。だから、イエス様を信じているけども、罪を犯してしまうということがあるのです。

でも、【主】がこのバビロンを打倒される時、私達は二度とこのサタンに苦しめられることはありません。だから、私達はこの【主】を私達の希望として、サタンに属する者ではなく、【主】に属する者として歩んでいきたいと思えます。

そして、未だサタンの支配するバビロンの住人として生きている多くの人に、【主】の日がくるまえに【主】の救いを伝えていきましょう。。